# 末梢血にCD57+/CD3+T細胞52.4%認めたAITLの1症例

## ――頚部ﾘﾝﾊﾟ節と末梢血のﾚﾊﾟﾄ解析――

○梅木　弥生,中山　みどり,胡内　久美子,辰己　節美,稲垣　明
(奈良県立奈良病院) 八木　秀男(奈良県立奈良病院　呼吸器内科)

【はじめに】Angioimmunoblastic T-Cell Lymphoma (AITL)は全身ﾘﾝﾊﾟ節腫脹,多ｸﾛｰﾝ性γｸﾞﾛﾌﾞﾘﾝ血症,自己免疫性溶血性貧血などの特徴的な臨床像を示す全身性の疾患である。組織像は血管の増生,淡明細胞の出現などが特徴的であるが、細胞異型が低い症例もあり診断に時間を要するケースがある。今回我々はAITL患者の末梢血に52.4%のCD57+/CD3+T細胞を認めた症例を経験したので報告する。

【症例】87歳女性　以前より甲状腺機能低下症・高血圧症にて通院、投薬にてｺﾝﾄﾛｰﾙは良好であった。平成15年5月外来受診時に右頚部ﾘﾝﾊﾟ節腫脹を指摘され、精査にて全身性にﾘﾝﾊﾟ節腫脹が認められた。悪性ﾘﾝﾊﾟ腫疑い右鼠径ﾘﾝﾊﾟ節生検行うも確診得られず、再度、確診を得るため右頚部ﾘﾝﾊﾟ節生検を実施、同時にFCMでの解析も実施した。CD10+/CD3+のT細胞を認め、Vβﾚﾊﾟﾄ解析にてVβ12のｸﾛﾅﾘﾃｨｰを認めた。非ﾎｼﾞｷﾝﾘﾝﾊﾟ腫AITL加療目的で入院となる。

【入院時所見】末血RBC412万/μl,Hb11.5g/dl,Ht34.4%,WBC3600(Ly33%)/μl,Pt13.1万/μl生化学AST35IU/L,AST17IU/L,LDH338IU/L,CRP1.4mg/dl,TP6.7g/dl,ALB3.9g/dl,BUN11mg/dl,INR0.96,Fib222mg/dl,βDｸﾞﾙｶﾝ2.3pg/ml,SIL2R5486U/ml,BNP130pg/ml 末梢血ﾘﾝﾊﾟ球解析4+/3+63.8%　8+/3+20.6%　57+/3+52.4%　10+/2+0.7%　56+/3+1.9%　57+/16+5.4%　CD57+/CD3+T細胞のﾚﾊﾟﾄ解析は多ｸﾛｰﾝ性であった。

【考察】頚部ﾘﾝﾊﾟ節解析にて　CD10+細胞を12.1%認め、その内CD10+/CD3+の細胞を10.3%認めた。このCD10+細胞をCD3+とCD3-についてそれぞれﾚﾊﾟﾄ解析した結果、CD10+/CD3+の細胞に関してのみVβ12にｸﾛﾅﾘﾃｨｰを認め。末梢血でのﾘﾝﾊﾟ球の解析でCD10+の細胞は認められなかったが、CD57+/CD3+T細胞52.4%認め、Vβﾚﾊﾟﾄ解析は多ｸﾛｰﾝ性であり腫瘍性を否定、反応性の増加と思われた。病態との関連を含め今後症例を集めて検索していく必要があると考えられる。

連絡先　0742-46-6001(2355)